

新潟県小千谷市における小学校児童の余暇時間の費やし方と生活習慣  
 ○山本拓実（早稲田大学人間科学部） 前橋 明（早稲田大学人間科学学術院）

2015年10月に新潟県小千谷市の小学校の児童296人（男子153人、女子143人）を対象に、生活習慣の調査を実施した結果、放課後の外あそび時間の平均は21分（6年女子）～1時間4分（6年男子）の範囲にあり、①外あそびに費やす時間が十分に確保されていないこと、②帰宅後の主なあそび場が、全ての学年・性において「家の中」や「家の庭」、「友人の家」が多く、外あそびの習慣がついていないこと、③放課後のあそび内容では、2年生女子を除く全ての学年・性において「テレビ・ビデオ視聴」か「テレビゲーム」が最も多く、2年生女子も「お絵かき」が最も多かったことより、放課後にはからだを動かす外あそび時間がしっかりと確保されておらず、夜に心地よい疲労感を得られていないことが明らかになった。そのため、就寝時刻が遅くなり、夜10時以降の活動において、「テレビ・ビデオ視聴」や「何もせず起きている」子どもが多く見られるようになったものと推察した。

今後、睡眠時間を増やすためには、夜10時以降のテレビ・ビデオ視聴をなくし、就寝時刻を少しでも早める必要があるといえよう。要は、小千谷市児童の生活リズムの乱れを改善するためには、放課後の外あそびを十分に行って運動量を増やし、夜には心地よく疲れて早く眠くなるような環境づくりと運動の実践が求められた。

子どもの水辺活動時の安全教育に関する一考察  
 ～引率者と安全装備に着目して～

○横山 誠・船越達也・山口直範・後和美朝（大阪国際大学）  
 キーワード：水辺活動の実態、安全具・救命具、大人の役割

近年の水難者数は減少傾向にあり、社会的にも対応策が講じられてきたかのように思うが、子どもの水難事故における被害者数は決して減少傾向にあるといえない。厚生労働省が発表した子どもの死因順位（平成26年度）では、不慮の事故について、0歳が5位、1～4歳が2位、5～9歳では1位であった。河川環境管理財団の資料（2003～2007年）では、子どもだけの川遊びによる水難事故発生件数が46件であったのに対して、大人同伴であっても44件発生し、そのうち13件は二次災害が発生している。ライフジャケットを着用していれば100%の安全が確約されるわけではなく、実際にライフジャケットを着用しての死亡事故も発生している。自然の中での活動は楽しさばかりではなく、多くのリスクがあることを保護者や指導者が認識しなければならない。

本研究の目的は、子どもの水辺活動における安全教育を推進していくために、子どもの水辺活動時の安全に関する実態を明らかにすることである。方法は、家族連れが多い海水浴場などでフィールド調査を行い、水辺での活動人数、安全具・救命具の有無、そこに関わる大人の役割などについて観察法を用いて明らかにした。